

令和2年度第3回 千葉市史跡保存整備委員会 議事録

1 日 時 令和3年3月16日（火） 午後2時30分～午後5時30分

2 場 所 千葉市立加曽利貝塚博物館 多目的室

3 出席者 【委員】

青木委員（委員長）、設楽委員（副委員長）、赤坂委員、高橋委員、
谷口委員、中村委員

※設楽委員・高橋委員・谷口委員はオンライン参加

【オブザーバー】

千葉県教育庁文化財課 吉野主任上席文化財主事

【事務局】

（文化財課）佐久間課長、森本主査、須賀主任主事、青笹主事

（加曽利貝塚博物館）加納館長、長原主査

（埋蔵文化財調査センター）西野所長

4 議 題

報告 （1）令和2年度事業報告

（2）令和3年度事業予算

議題 「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（中間取りまとめ）（案）」について

5 議事の概要

報告（1）令和2年度事業報告

事務局より内容を説明。耐震改修工事を終えた住居跡群観覧施設の内部環境変化の調査やアプリ制作後のアンケート調査を実施するなど、効果検証を行うよう委員から意見があった。

報告（2）令和3年度事業予算

事務局より内容を説明。博物館の展示事業について、千葉県内遺跡や加曽利E式土器の調査研究のみではなく、縄文文化研究のトピックを広く含めるよう委員から意見があった。

また、御所野博物館との連携した展示については、加曽利貝塚との共通項を紹介するなど、一方通行にならないような展示を工夫するよう意見があった。

議題 「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（中間取りまとめ）（案）」について

事務局より内容を説明。イメージ図の修正や英語のフレーズなど委員から意見があっ

たことについて事務局で再考し、次回の会議で報告を行う。

6 会議経過

【開会】

(事務局)

ただいまより、令和2年度第3回千葉市史跡保存整備委員会を開催いたします。本日は年度末のお忙しい中、会議にご出席いただき、まことにありがとうございます。

それでは、議事に入ります前に、本日の会議についてご説明いたします。本委員会は本市の情報公開条例に基づき、公開といたします。傍聴人の方はお手元にお配りした傍聴要領をご確認の上、お守りいただきますよう、お願い申し上げます。本日の会議につきましては、設楽副委員長、高橋委員、谷口委員はオンラインでのご出席です。竹内委員は、ご都合によりご欠席ですが、委員の半数以上のご出席をいただいておりますので、千葉市史跡保存整備委員会設置条例第5条第2項により、会議は成立しておりますことをご報告申し上げます。議事録は事務局が作成し、委員長承認によって確定いたします。

なお、本日はオブザーバーとして、千葉県教育委員会文化財課より主任上席文化財主事吉野様にご出席いただいております。

それでは、これより会議に移らせていただきます。ここからは、青木委員長に進行をお願いいたします。

青木委員長、よろしくお願いいたします。

(青木委員長)

それでは、第3回目の史跡保存整備委員会を開催させていただきますが、今事務局の方からご説明ありましたように、オンラインも併用しますので、よく聞き取れない場合がある場合は挙手などしていただいで再度確認していただくよう、ご協力をお願いいたします。

それでは議事に入りたいと思います。議題の(1)「令和2年度事業報告」について、事務局の方より説明をお願いします。

【報告事項1 令和2年度事業報告】

〔事務局説明：資料1 令和2年度事業報告について説明。〕

(青木委員長)

ありがとうございました。令和2年度の事業報告についてご質問ございますか。あるいは、これに伴う要望などはよろしいですか。

それでは私から2点ほどあります。先ほど北貝塚住居跡群観覧施設を見せていただきました。耐震改修工事が終了し、だいぶいいものできていると拝見させていただきました。

先ほどもお話しましたが、新しい施設で内部環境変わるので、そのチェックをしてい

ただけるとありがたい。過去のデータもありますので、耐震改修工事によりどういう風に変化したかちゃんと把握をしていただいて、今後何かトラブルがあったとしても参考にさせていただければと思います。

おそらく照明にLEDを使ったりしているのは新しいケースだと思いますので、市で調査をしていただいて、報告書なりをまとめていただきたいと思います。それは来年度以降でお願いできればと思います。

それからもう一つですけれども、今年度の事業でアプリを制作したということで、現地でタブレットを使って解説板の説明や映像も見せていただきました。これは新しいことでとてもいいと思います。

ただ端末が30台になります。せっかく動画も作っていますので、何かその動画を利用できないかなという風に現場の話を聞いて思いましたが、例えばYouTubeに入れてしまうのはどうでしょうか。

皆さんスマホを持っているわけですから、場合によったらスマホでアクセスして映像を視聴するというのもあり得るだろうと思います。

あるいはGoogleと連携をして、Google Mapの中に入れてもらって、そこに行ったら映像が出てくるというようなことは多分できるのではないかと。

だからそのあたりについてご検討いただくのと、あのコンテンツが多分コロナ以降も利用できると思いますので、その辺りがどういう効果があったか、例えばアンケート調査みたいなこともしていただければありがたいなと思います。積極的に利用していただければ、もっと広がるようなことで利用していただければありがたいなと思います。

私からは、事業報告についてはそれだけです。他にございますか。

(中村委員)

今年度、私は特別講座の「考古学研究の最前線」に参加させていただいて、非常にすばらしいと思いました。コロナ禍でしたけれども加納館長はじめゲストの方もすばらしい内容で、好評だったというように思います。ぜひ今後も続けてもらえるといいかなと思います。

それから今アプリの話が出ましたが、実はフィールドでああいうのを見せるというのは、特に子どもがアプリに夢中になってしまうと現場を見なくなってしまうんです。

一生懸命アプリばかりを見て。だから、教育的なこういった映像を見せるとかネット上でどんどん使っていくことはいいと思うんですが、その辺は今「スマホ脳」というのがいろいろ問題になっていますので、やはり現場に行ったら現場で、フィールドを見る、モノを見るという形も重要だと思います。その辺りについては試行錯誤して考えてみていただければいいかなと思います。

(青木委員長)

はい、ありがとうございます。他にございますか。

それでは、なければ「令和3年度事業計画」のご説明をお願いいたします。

【報告事項2 令和3年度事業計画】

〔事務局説明：資料2 令和3年度事業計画について説明。〕

(青木委員長)

ただいまの説明について、ご質問やご意見はありますか。

(谷口委員)

これは報告事項なので、内容をこれから変えるということにはできないと思いますが、博物館の展示事業の内容について前年度の報告でもそういう感じがしましたが、千葉県内に目が向いている半面、縄文全体に対する視点が少し弱いような感じがします。

せっかく特別史跡になって縄文文化研究の研究成果を発信していく拠点を目指しているわけですから、県内の遺跡や加曽利E式の調査研究成果を丹念に出していく部分はあってもいいと思いますが、同時にもう少し広く縄文文化の研究のトピックを展示計画の中に含めていくことはできないのかなという感じがします。

(加納館長)

谷口委員がおっしゃった全国的な視点をということですが、現状の博物館の研究成果の展示が、今まで加曽利E式展のみというところでありまして、今後の予算取りや人員増員を視野に入れて、現状の人員と予算の範囲内で、少しずつ少しずつ広げていくことを目指しています。

その第一弾として、今年度と来年度開催の、県内縄文遺跡展が該当します。

また、現在は三内丸山遺跡展を開催しておりまして、全国的な視野も入れて、千葉市で持っている三内丸山遺跡の土器を展示しております。

こういう形で少しずつ視野を広げて、人員や予算の拡充を目指し、ゆくゆくは全国の縄文時代の遺跡の研究のネットワークの頂点に立てるような博物館を目指していきます。

(青木委員長)

ありがとうございました。ではなるべくそういう方向でいろいろお考えいただきたい。谷口委員、そういうことでこれについてはご了解いただければありがたいと思います。博物館もそういう方向を目指しているということですので、いずれもう少ししつかりした形になると。

(高橋委員)

「御所野遺跡関連展示」というのがありますが、これは北海道・北東北の世界遺産絡みの関連展示と捉えてよろしいでしょうか。

(森本主査)

はい。御所野縄文博物館と連携で進めておりまして、加曽利貝塚博物館の展示とし

ては、それに関連して千葉の遺跡を中心に縄文時代を知ってもらうという展示を行う予定です。それと合わせて、市の生涯学習センターで御所野縄文博物館のパネル展示も行います。ともに5月18日から行う予定で、御所野縄文博物館と連携して、御所野遺跡を中心に北海道・北東北の縄文遺跡群を紹介する展示をこの時期に千葉市でも展開したいと考えております。

(高橋委員)

加曽利貝塚と御所野遺跡で、お互いに相照らすような共通項みたいなものがあれば、少し違うけれども比較することは大変面白いんだというような学術的な面白みや関心があれば私は大賛成です。具体的にはどのような対応をお考えでしょうか。

(森本主査)

生涯学習センターでは、基本的には関東地方で御所野遺跡を紹介したいという向こう側の要望がありまして、横浜市でも同時に同じような展示会を開催する予定です。

加曽利貝塚博物館では、千葉の遺跡と連携するような内容を展開できればという風に考えておりますが具体的に中身のところまでは詰め切れていません。

(高橋委員)

ご存知の通り、土で屋根を覆った土盛り屋根の住居とか石造遺構だとか、個人的には私好きなのですが、例えば中期の終わりくらいから地面を大規模に造成しているというのは、恐らく東北地方でいち早く発見されたと言ってもいい遺跡なので、もしそのことが共通項としてあるならば、加曽利貝塚も実はこうですよという内容にしてもいいと思います。

特に後期の南貝塚についてはそういう可能性があるのです。今回の発掘調査でも中央の低地の部分は削られている可能性があるわけですので、そういった造成の部分うまく組み合わせてやると興味が出てくるなど。そうではなく、一般的に御所野遺跡はこうでしたという感じになってしまうと一方通行で終わってしまいます。その辺りを検討していただけるとありがたいと思います。

(森本主査)

高橋委員のご意見を踏まえながら展示の構成を進めていきたいと思っております。

(青木委員長)

それでは「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画(中間取りまとめ)(案)」について、ご説明をお願いします。

【議題 「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（中間取りまとめ）（案）」】

事務局説明：資料3 「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（中間取りまとめ）（案）」について説明。

（青木委員長）

今後議論を深める中で質問が出てくると思いますが、今の時点で質問ございますか。

（設楽副委員長）

質問ではなく補足ですが、前回の議論の中で重要な点が今の説明で抜けていたように思います。65ページの組織体制ですが、以前は展示担当が企画運営部門の専権事項のように書かれていました。そうではなく、展示というのは研究の一環でもありますので、企画運営部門と一緒にやっていくということで線をそれぞれから降ろして一緒に担当していくということです。以上です。その説明をと思いました。

（佐久間課長）

失礼いたしました。その説明が抜けておりました。

ご指摘を受けて、65ページの組織イメージ図を直しました。企画運営部門の配下に、そこからしか線が伸びていなかったのを、研究部門からも線を伸ばしました。

（青木委員長）

その他第一章ですが、何かご意見ありますか。

（高橋委員）

冒頭に申し上げねばいけなかったのですが、佐久間課長から基本方針をご説明いただいた時に貝塚を中心とする縄文文化の研究という言葉の中には、縄文時代の「社会」という言葉が内包されているというご丁寧なお言葉をいただきました。

昨年来、私も「社会」という言葉を口やかましく盛り込んでくれと再三申し上げていたことがこのようなかたちで各文章に盛り込まれていることに感謝申し上げます。

それでおかつここで説明を求めるわけではありませんが、65ページで保存研究部門を設けられたのは当然のことと思います。こういった大きな貝塚、遺構を含んだ大遺跡だけに、様々な形で保存処理をしなければいけない局面が出てくるはずですので、こういったことに私は大賛成です。それは問題ないですが、研究部門の中に基幹研究というのがあって、これは縄文文化や貝塚に関する調査研究ということで大いに結構ですが、もちろんこの中に「社会」というものが含まれていると理解してよろしいですか。

（佐久間課長）

もちろんです。

（高橋委員）

ありがとうございました。これで大丈夫です。

（赤坂委員）

第一章に関係して1ページ目の部分です。発掘調査の歴史ですが、加曽利貝塚は千葉

市民の保存を目指す市民運動から始まって、アカデミズムに先行して市民の保存運動があったことは、博物館もそういった市民の動きがなければこういった構想も生まれなかったはずですよ。ぜひ触れてほしいことと思います。

(谷口委員)

先ほどの高橋委員の話と関連するのですが、2ページの上の加曽利貝塚の特徴というところが気になっていました。

この中で、⑨で社会という言葉が出てくるんですけど、やっぱり縄文社会でという視点が希薄な感じがするんですよ。それで表の②のところを見ると、縄文人の暮らしを紐解くという情報の宝庫であると。それは確かにそうなんですけど、縄文人の生活がどういう状態なのか、何をとって何を食べていたのかということについて、加曽利貝塚に多くの情報があるのは確かですけど、同時に縄文社会についての情報もすごくあるんですね。

加曽利貝塚の特徴というのは、端的に言うと埋葬じゃないでしょうか。加曽利貝塚と人骨の埋葬は切り離せないと思います。このような特異な大規模貝塚がなぜあんなに長く時間をかけて形成されたのかという最も本質的なことを考えると、やはり埋葬というものは切り離せないと思います。

ですから、加曽利貝塚の価値としては縄文人の暮らしを紐解く情報は確かですけど、同時に縄文社会とか縄文社会の歴史についての情報も沢山そこに埋蔵されていることをもっと前面に出すべきだと思います。

それがこの9つの特徴の中に欠けている気がします。

(青木委員長)

具体的にはどうしましょう。特徴①を設けるよりも、例えば②などを書き直すことで表現することは可能でしょうか。

(谷口委員)

そうですね、「縄文人の生活と社会」とか「縄文時代の文化と社会を紐解く情報の」という。

(青木委員長)

それでは特徴②のところでも今谷口委員がおっしゃったことを具体的に書き直すというところでよろしいですか。谷口委員から具体的に文言の提案をお願いしますか。

(谷口委員)

社会に関連しそうなところは③にもあります。③は大型貝塚と大形建物を丸ごと残す拠点集落ということになっていますが、拠点集落とは拠点貝塚とはどういう性格のものなのかということがここにはあまり表現されていないと思うんです。

それは縄文社会とか縄文社会の歴史という視点が盛り込まれていないようにここでも映ります。

(青木委員長)

それではこの部分について、いくつか谷口委員に具体案を出していただくようにし

たいです。

(谷口委員)

わかりました。ただ、私はそういう考え方ですが、他の委員はご異存ないでしょうか。

(高橋委員)

谷口委員のお話に全面的に賛成です。①で大型貝塚ということを特徴に挙げていて、②は貝塚を取り上げて彼らの生活あるいは生業というものを中心に言われていると思うので、特徴の③に普通の住居のほかに大形建物あるいは埋葬墓地を丸ごと残すなどにすれば、特徴の③はある意味では社会のことそのものを指しているコーナーになると思います。

もちろん②でもいいし③でも構いませんが、ある程度特徴を固めた方がいいのかなと思います。谷口委員にぜひその辺をご考案いただければと思います。

(青木委員長)

それでは高橋委員と設楽委員と谷口委員の間で議論していただいてご提案をいただければありがたいです。

他の委員も事務局もそれでよろしいですか。

(全委員)

異議ありません。

(青木委員長)

それでは谷口委員よろしくお願いします。

私が気になるのは、3ページ目(2)博物館の継続的な活動の一番下に「市民向けの講座、教室および体験プログラムなどの様々な体験学習の機会」と書いてあるけれども、これは生涯教育に直した方がいいと思います。他のところを見ると、生涯教育という言葉で表しているところが多いと思うので、私は体験学習より生涯教育という言葉で表したほうがいいと思う。

それと、次の段落で博物館の課題が書かれていて、前に比べてきちんと書かれているけれども、私の理解ですと博物館を新設するに関して目的の一つは今の博物館に課題があつてそれを解消するために建てるわけです。それがこの部分にはあまり触れられていない。後半に行くとはほとんどそれが出てこない。

私たちが行政の中に行った時に、ある課題があつてそれを解決するために一つの施策を立てるわけですから、博物館を建てることもそういうことだと思います。

ランドデザインの将来像なども課題を踏まえてそれが出てきているので、もう少し課題を具体的に乘せていただいて、あとのところでこういう課題はこういうことで解決しますよという段落に結び付けられるような構成をしていただければありがたいと思います。

その部分があまり見えていない気がします。新しい博物館を建てるのは、あそこは遺跡内だから外に出ましようという議論や老朽化はあるけど、そういう課題は将来構想の

中でこう解消していくということがわかるかたちにさせていただきたい。

基本方針をそういった視点で文章をチェックしていただければありがたいです。他にいかがでしょうか。

(設楽副委員長)

先ほどの縄文社会の問題は議論が無いように思えますが、「文化と社会」なのか「社会と文化」なのか。それを切り離すことはできないですが、文化といった場合は生活文化というようなニュアンスで、人々の営みについてですよね。特に加曽利貝塚では竪穴住居だとか貝塚だとか生業だとか、そういった行為が考えられる。社会といった場合は竪穴住居で暮らしていた人々の関係性というテーマになってくると思います。

家族だとか親族形式あるいはよその集落との関係だとか。文化でも社会でもなかなか結論は出ないとは思いますが、特に社会問題は結論を導くのがなかなか厄介だと思うんですね。

展示の校正の時にも出てくると思いますが、やはり文化をまず示しておいて、そこからまず社会を推察していくというような方向になっていくと思うんです。

以前中村委員のご発言で、社会というのは文化の中に包摂されるというお話がありました。今「社会と文化」に全てなっていると思いますが、「縄文文化と社会」のほうがいいように思います。少しご検討下さい。

もう一つは、これも中村委員からのご提言ですが、インパクトが小さいなど。確かに1ページをめくっても、胸に迫るものが少し足りないかなと思います。

これは前文をつけたらどうかと。半ページでもいいので、2ページの9つのパネルを文章にして、格調の高い文章で、「はじめに」をつける。では文章を考えてと言われると困るのですが、それができればと思います。以上です。

(中村委員)

青木委員がおっしゃられた3ページ目の課題について。1ページと3ページの下に囲ってサマリーみたいなものをつけましたが、サマリーよりもアブストラクトということで一番上の先頭に持ってくる方がいいかと思います。人に読ませたいのかどうなのかという感じがします。そもそも課題になっていません。

課題の認識と共有というのは非常に重要なことです。今記載されていることは今でも行っていることですよね。今でも行っていることを二つ並べても全然意味がない。本当に課題をきちんと書いてもらいたいというのと、1ページもそうですがこの表の小さな文字をアブストラクトする時に大事なものは、国の特別史跡に加曽利貝塚が2017年10月に指定されたことを一項目として設けて、それで加曽利貝塚の価値と魅力を高めつつ広く発信して多くの人にも親しまれる環境作りが求められることになったんだと思います。

だから最初の囲いは非常に大事なことなので、その中に特別史跡にされたことはきちんと項目立てするべきだと思いました。

それから8ページ。この概念図はせっかくだから、もう少し工夫してください。今のままではどちらが主で、どちらが概念図で示そうとしているのかわからない。

今の図は、3つが等しく団子のように連なっていて、これは新博物館が小さく見える。やはり周辺エリアがあってコアエリアがあってそこに少し被る形で新博物館をつくるんだという右上の図だけでいい。それで文章は右上の図をきちんと大きくしてはめ込むか、さもなければ文章は別でいいですがこの丸は取る。どちらの概念を主張するのか。今のままではだめです。

大きい丸の3つが、これがあちこちにあって繋げるというのではなくて、右上の図を作ったのだから図形はこれ一本にして文章をうまく入れていくべきです。

それから9ページに新博物館ゾーンのテーマというのが出てきて、18ページに事業活動のテーマが出てきます。

私は、新博物館の基本方針の時にゾーンのテーマが出てくることに違和感があります。一番大きなテーマが概要のところには出てこない。だから、あなた方がどのテーマで勝負をかけようとしているのかわからない。ゾーンのテーマというものがあるとしても構いませんが、博物館のテーマというのか、テーマという言い方なのか理念が読み取りづらい。理念という言葉がない。新博物館をこれからPRする時のことを考えてください。

それで、設置する時には設置目的を作ります。これは憲法のようなもの。理念的なものがどこにあってどれをPRするのか。私は一般の人にはむしろ、18ページにある『LIVING JOMON』、生きている縄文』をと 생각합니다。

このゾーンのテーマはあってもいいけれども、基本方針の前に掲げた方がいいと思いました。今は事業のテーマとゾーンのテーマがあって、博物館そのもののテーマ・理念がない。方針がダーッと来ている。そういうような構成というのが、我々はわかるけど一般の人はわかりづらい。

概要は、今の案を見ると最初に指標すべき姿があって役割があって基本方針があって、右には利用活用の基本方針があって。何だかいっぱい柱があって。概要版を見るとこの博物館は何を理念として目指しているのか。個々の思いはちりばめられているけど、理念が伝わりづらい構成になっているかなど。少なくとも8ページのこの構造図は変えるべきです。以上です。

(青木委員長)

2ページの特徴ですが、具体的に3人の委員に話し合っていて谷口委員がまとめる方向で行きたいと思います。その後、設楽委員からこれを前文のようなかたちでまとめた方がいいのではないかという意見がありました。その辺は申し訳ありませんが事務局と設楽委員、高橋委員、谷口委員の3人の委員で話し合っただけだと思います。

(設楽副委員長)

2ページのパネル図ですが、わかりやすいのでそのまま生かしていただいて、前に前

文をつけてはどうかというのが私の考えです。

(谷口委員)

ただいまチャットで特徴③の文案を送りました。

(青木委員長)

「2千年の歴史の中で累積した多数の埋葬人骨や大形住居を丸ごと残す拠点集落」
でいいですか。ではとりあえずこれを入れて、継続して事務局と議論してください。

設楽委員が提案された特徴①から⑨はそのまま生かして、前文についても議論して
いただいていいですか。

(中村委員)

8ページは変えていただけますか。

(森本主査)

下を表みたいにまとめる形にして、右上の図を大きくする方がいいですか。

(中村委員)

そうですね。でないと下の図の方が概念化してしまうように捉えられますので。

(青木委員長)

では中村委員のご意見も反映していただき、事務局で修正お願いします。

それでは次に17ページ以降の第2章の事業活動計画を前回から具体的に修正した
ところがありますがいかがでしょうか。

(谷口委員)

18ページですが、キャッチコピーの「LIVING JOMON」は以前の議論で
も色々あったと思いますが、このままいくのでしょうか。やはり少し違和感が残ります。

ネイティブの研究者に意見を聞いてみる方がよいのではないのでしょうか。今後海外か
らの見学者が来ると想定しているので、この辺に違和感が残ってしまうと残念な結果に
ならないか心配です。

(高橋委員)

谷口委員がおっしゃるとおり、ネイティブに確認してもらった方がいいです。もうお
済みですか。

(森本主査)

一度確認して、このフレーズは縄文人が今でも生き残っているようなイメージを与え
ると言われています。

(高橋委員)

おっしゃるとおりで、今日本列島で東京も千葉市も現代社会を謳歌しているのに、加
曽利貝塚に行けば縄文時代から延々と同じ生活をしている人たちがいるんだというよ
うに捉えられます。

「survive in JOMON」と全く変わりがありません。今回意味するのは
そういうことではないですよ。これは絶対変えた方がいいです。

考古学を専門とする方でもいいし、そうでない方でもわかると思いますので。

(青木委員長)

では検討していただくということでいいですか。

(森本主査)

はい。

(青木委員長)

それでは事務局で検討します。何かアイデアがありましたら事務局へお願いします。

(中村委員)

「L I V I N G J O M O N」は問題があるとしても、私は縄文時代が今に生きているんだという方は、えっと思う人がいるとは思いますが、普通の人にとっては引っかけりになると思う。

だから「L I V I N G J O M O N」の英語的解釈がどうかというよりも、「生きている縄文」というものを博物館をつくる時のキャッチコピーにしたほうが私はいいのではないかと思う。

(高橋委員)

キャッチコピーとしていうならば、加曽利貝塚に行けば縄文時代が再現できますよとか、その一部を味わうことができるというイメージで使っているのだろうと思います。

それでいうならば、「L I V I N G」というのは少し妙です。加曽利貝塚に行けば、本当に縄文時代の生活そのままが、そのままの人たちが、3千年、4千年ずっと住み続けているんだよというイメージなんです。

でも、そういうことではないですよ。

(中村委員)

そういう見方を本当に外国の人がするのかということと、やはり縄文時代というものの文化とか自然と人間の関わりというものがここに行ったらまだ学べますよということだと思っんですよね。

(高橋委員)

そうするとやはり「L I V I N G J O M O N」というイメージではずれてくると思っています。

(中村委員)

私は英語はわからないので、縄文というのが生きているということで、縄文人という風に捉えられるんですかね。英語を強調する必要は無いとは思いますが。

(高橋委員)

「L i v i n g i n J O M O N w e o f l i f e」とか、そういった言い方になると思います。「L I V I N G J O M O N」も、「学ぶ」というかそういった言葉がつくのならこれでもいいと思うけど、この2単語ではなかなか通じないと思います。

(青木委員長)

今の議論を聞いていると、何を表現したいのかが明確ではなくて、それぞれが共有できていないからこういう話になるのだと思います。

これはもう少し事務局で詰めていただいて、共通理解になった時にこういうキャッチコピーにしたいと対処していただく方がいいと思います。

そうしないとこの議論は永遠に続きますので、もう少し概念というか定義付けをきちんとしていただいて、その上でどういうキャッチコピーにするか考えて下さい。

英語ではなくてもいいだろうという意見もあるかもしれませんが、キャッチコピーをつくるクリエイターに聞いてみた方が早いかもしれないです。

そもそも論に戻ってしまいますが、その作業をやらざるを得ないだろうなどは思います。皆が概念を共有できていない。今の中村委員と考古学関係の委員は。再度、元に戻ってしまって申し訳ないですが、整理していただければありがたい。そうでないと次に進めない。

これはある意味、今度の新しい博物館の重要なロゴでありキャッチコピーですから。

今は、かそりーぬがロゴですけど、博物館は博物館のロゴを作って、キャッチコピーを考えなければいけませんから。

それが博物館の展示テーマなどに活かされると私は考えていますので、そもそも論に戻って申し訳ありませんが、定義づけはしっかりしていただいて文章にすることにして下さい。

(赤坂委員)

私も英語は不得意でよくわかりませんが、縄文に学ぶというテーマであれば、「L e a r n i n g J O M O N」とか、縄文に学ぶというのがあれば包括するかと思います。学び方はいろいろあると思いますが、それとここで谷口委員が前からおっしゃっていた縄文時代とか縄文社会に対する偏見を一新するということが盛り込まれるべきだということ。左の原始的なイメージを刷新するって書いてありますね。この原始的を「」に入れたいと思うのですが、谷口委員いかがでしょうか。

(谷口委員)

私はこの意見がこういうかたちで盛り込まれたので嬉しかったんですけども、原始的なイメージを刷新すると。これで違和感はありません。

(赤坂委員)

それから23ページのイラストですが、真ん中の図を見て、今までの谷口委員のご意見を考えるとどう思われるかなと。

沖縄県の首里城を案内する人たちはコスチュームを着ていて、宮中の役人の恰好だと聞いたことがあります。急にこんな話も難しいですが、考古学の委員に監修していただいて、ここにふさわしいユニフォームを考えてもよいのかなと思いました。以上です。

(青木委員長)

ありがとうございます。今のところは共通認識をとっていただいて。そもそも論にな

ってしまって申し訳ありません。

それでこの事業計画の中で重要なのは、調査研究のテーマと思いますがいかがでしょうか。

(設楽副委員長)

17ページの図はこういった形で整理して、調査研究が前面に押し出されていて結構だと思います。

今、矢印で上下に繋いである調査研究と収集保存、そして下に展示という図で、上が理念でそして下が実際に行う活動となっていますね。

抜けていることに気付いたのですが、具体的にどう活動をして、どう情報を発信していくのか。

展示はもちろん一つで情報発信なのですが、調査研究として貝塚関係のデータベースをつくる。そしていろいろな蓄積を行って成果をシンポジウムやフォーラムなどで深めて発信していくというようなことがあるわけですが、それがこの中には抜け落ちていると思いますでしょうか。

一案としては共同研究、シンポジウムやフォーラムを、展示などの教育普及に入れ込むと。つまり丸を3つにして、名前をシンポジウムなどにしてもいいかもしれませんが。データベースを中に含めて。そうすると緑の丸を3つにしたほうがいいのかと思いました。

(青木委員長)

これはある意味設楽委員のおっしゃるとおりです。とても申し訳ない言い方をすると、この表だけを見ると旧来の博物館学の概念図です。

今、博物館学が若干変わってきている。情報発信が重要視されていて、ある意味活用というキーワードが重要になってきている。展示公開の活動も活用ですけど、新しい博物館学の動きをこれでは捉えきれないくらいがある。

ですから、そこはどういう風にしていくかももう一度検討していただけるとありがたい。新しい博物館学の動向についてももう少し事務局で情報を出していただいて、議論させていただければありがたいです。いいですか。

(設楽副委員長)

最後に今のところで付け加えます。文章の最初の2行目に展示とありますが、データベース構築、シンポジウムあるいはフォーラムが入ってくるわけですね。展示等による情報発信というそのものを加えた方がいいと思います。

(青木委員長)

裏のほうに少し書いてあると言えば書いてあるけれども。

(森本主査)

今設楽委員がおっしゃったことが、19ページ以降では例えばシンポジウムは20ページに調査研究の中で入れていて、データベースのことは資料の収集保存活用の中で2

1 ページに書いています。そこをこの中から抜き出して、1つの項目として立てるべきだというご意見ということでよろしいですか。

(設楽副委員長)

はい結構です。ですので、前文の2行目を展示とだけすると、殊に情報発信の方法が展示だけと見られてしまうので、今事務局から言われたように19ページ以降には細かく書いてありますので、それをまとめるようなかたちになればいいと思います。

一言で表すようにしてもらって「展示や〇〇における情報発信」と書いていただければそれで結構です。

(青木委員長)

そこはまた私が先程言ったようなことを加味していただいて考えていただければと、そういうことにしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(谷口委員)

23ページの対話型展示のところですが、対話型展示の中で来館者に何かを考えてもらいたいというところですけど、文章の中にはっきり表れているのは持続可能な人間社会の未来というような側面ですよ。

それははっきり書かれていて、それは大事な問題だから考えてもらった方がいいと思いますが、それ以外にどういうことを考えさせたいかというのが見えていないような気がします。

先ほどの原始的なイメージを縄文時代像に押し付けてきたわけですけど、それは狩猟採集民に対する文明側からの差別のような側面があります。先日あるテレビ番組で、アイヌ民族を侮辱する差別発言が出ましたが、ああいうのも依然として狩猟採集民に対する偏見が日本社会から払拭されていないことを表していると思うんです。森元首相の女性蔑視発言もそうですが、日本ではなかなかそういった差別が意識の中から無くなっていかないのは、日本社会の暗い側面だと思うので、そういうことを考えることにもなると思います。

縄文社会を見直すことは、狩猟採集民を見直す、あるいは日本の歴史を見直すことになるのではないのでしょうか。加曽利にはたくさんの方が来るとは思いますけど、縄文人と自分たち自身の関係について深く考える人はいないと思いますよ。原始人はこんな生活していたんだという見方だと思います。小学生はもちろん、教えている先生にもそういう意識はないと思います。

やはり日本文化や日本人を考える時に、縄文という歴史は絶対に切り離せないと思うので、そういうことを対話の中で考えてもらうことをちゃんと位置づけるべきではないのでしょうか。

(青木委員長)

持続可能な人間社会というのは一例として取り上げているだけだと思いますが、そこにはジェンダー論だとか様々な問題があるので皆さん考えましょうということですよ

ね。

これは表現の問題で、もう少し現代社会の様々な問題を今日日考えるきっかけの一つになるような文章表現でもいいのかなと思いますがいかがでしょうか。

(中村委員)

原始的なものというものの劣っている面やマイナスの面など、そういった観点が日本人にあるというのは私にはぴんとこなくて。もしそうであるとすれば、縄文時代のいいところとか学ぶべきところをきちんと提示しなくてはいけないですね。だから、それをやはりきちんと具体的にしないと。我々が将来を考える時に縄文時代に学ぶべきことはたくさんあるのだと。それはこういうところだと。そういう脈絡を付けることだと思います。具体的には、縄文時代は加曽利では数千年も続いてきたとか、やはりそういうことを具体的に示すことだと思います。自然を壊さなかったとか、その周りの環境の範囲内でしっかり我慢して生きてきたとか。何を原始的なものとしてそのマイナスを払拭するような材料というのは具体的にどういうもの考えるのかということがよくわからないんです。

(谷口委員)

例えば貝塚の中にたくさん人が埋葬されているというのは、死生観みたいなものに関わるし、それから祖先観念とかを表すものだと思うんです。その縄文人の持つ死生観やそういうものに触れて、自分たちの死生観の問題・歪みというのが見えると思うんです。

今は死の問題は医療的な問題にしかなくて、なるべく目を逸らしたい。死ぬことから目を逸らしたい人がほとんどだと思うけれど、それから死んだら終わりだと考えている人が多いと思うけれども、でも縄文人はそういう風には考えてないと思うんです。だからそういった全く異質なものに触れて、自分が考えるということが対話になるのではないのでしょうか。一つの例ですが。

(中村委員)

要するに、未来に対してお手本とすべきものとか学ぶべきものが縄文にはあるということですね。

(赤坂委員)

縄文に学ぶということですね。縄文の社会と文化という実態をまず知るということはありませんけど。歴史的な保存ということについては、20年くらい前ですがオーストリアのイコモスの会長だった人が話していたことですが、大きくはインタープリテーションとアプリケーションと、2つに大きく分かれる。

17ページの図ですと、上がインタープリテーション。研究とか、どう解釈するかということ。

アプリケーションは応用ということもあるけれども、現代を生きる人たちにどのような意味があるかを提示することだと思います。

これまで考古学の先生の話をしていろいろ聞いたけれども、やっぱりインタープリテーシ

ョン。研究を積み立てて知に積む探求だということを言っていたけれども、もう一つのアプリケーションというのは社会的な関心ですね。社会的な支持と言いましょか。そういうものを蔑ろにしたというか重きを置いて来なかった。

だから、ここの17ページの上の2つの表は上下になっているけれども横に並べたい。そうすれば車の両輪になります。どちらかに偏っていれば変な方向に行ってしまいます。社会的な関心とか支持というようなものが、これを支えてくれるはずなんです。ここにこれまではあまり力を置いて来なかったと私は思っています。

ですから、新しい博物館は是非ともただ単に広報とか集客ということだけではなく、むしろそういう展示に込められたものとか、教育普及とありますが普及ってすごく大事なことなんです。まさに調査研究と同じくらい、博物館としては力点を置かなければならないと私は考えています。

縄文ということから何が学べることなのか、現代に生きる人にどう示すか。これはすごく大事なことです。それは広報集客と同じようにあまり扱ってほしくないと思います。
(青木委員長)

いろいろなご意見が出てきました。取りまとめるには時間がないので、事務局で勘案していただいて、また試案を立て直していただいて、その上で議論もしくは事前
に示していただく方向でお願いします。

もう一つこの中で重要なのは、新しく出た部分で、29から30ページにかけての博物館と史跡そのものを一体に考える中では当然出てくることだし、それは一体に考えるというのがこの委員会の中での意見でしたので、これについてご意見ありますか。

では、無さそうですね。次に、3番目の施設計画に行きたいと思います。

施設計画についてご意見等ございますか。これも前提がようやくできたというような感じでしょうか。

(中村委員)

53ページや54ページは図面が書かれていますが、これは全般的に言えることなのですが、加曽利貝塚の宝というのがありますよね。

そういうものがこれを見ると言葉ではあるけれども、博物館はモノで勝負するとか、フィールドの状態もありますが、そういうものを示しながらの動線と思うけれども、こういったパース図というよりも加曽利貝塚の宝というのを具体的に示したらいいのではないか。先ほどの展示でも、ここだからこそこういうものが見られるとか。そういうのもっと工夫して入れてもらってもいいのではないかと思う。

(青木委員長)

施設の基本的な考え方は項目を立てて考えてくれていますが、この中に基本的な考えの一つは公開承認施設にするわけでしょう、公開承認施設という言葉が入っていないとおかしいと思います。施設にすごく影響を与えるわけだから。そのあたりも細かいことですが見直しをしてもらえませんか。

(森本主査)

公開承認施設については、33ページの(2)博物館の機能拡充のところに3つ目に「文化庁による国宝・重要文化財の公開承認施設の基準に適合できる施設整備を目指す」というのを文章として入れさせていただいて、42ページにこういった条件を満たすことというのは入れてあります。

(青木委員長)

書いてあるのは知っているのですが、基本的な考え方というのはどういう施設を目指すのかという重要項目を挙げるところなのに、公開承認施設を目指すことがどこにも載っていないのは、それが基本方針としてなければおかしいと申し上げたところです。

(森本主査)

例えば、(2)の博物館の機能拡充に例示として入れるくらいの重要性があるということでしょうか。

(青木委員長)

そうです。それはやはり博物館の機能として重要なことですので。この前も話しましたけれども、将来はやはり加曽利貝塚の遺物が当然のことながら重要文化財になるように申請するのだからけれども、そういうことを踏まえると公開承認施設というのは入れることなのかなと思います。それに伴う設備も考えなければいけないと思います。

では時間も押していますので、施設計画については後で議論するにしてもこれくらいとして。展示計画はいかがでしょうか。

(谷口委員)

56ページの表ですが、これまで狩猟についてはこの委員会で何度も申し上げましたが、どうしても狩猟をやらないといけないのでしょうか。

「今までにない狩猟体験の提供」ということで、何度でも楽しめるとあるけれども、どうしてもこの加曽利の新しい博物館の体験型の展示として狩猟が上がってこなければいけないのかということがどうしてもわかりません。

これは、原始的なイメージを取り払うと書いてあるけれども、どうしても原始的なイメージを助長すると思いますが、もっと他の発想は無いのでしょうか。このままだとこのようになって行く気がします。

(青木委員長)

はい。それもそうですが、方針が変わってきたわけですね。元々体験的なミニアトラクションをやろうといていたけれども、映像に切り替わるということで。そうするとこの全体が、中身が、もう少し変わらざるを得ない。その変化が、私がこれを読んだ時に生かされていないと思うのですが。そこはどうでしょうか。

(森本主査)

映像にすることを踏まえた上で修正をしており、そこでできる範囲のことを書いています。

谷口委員のお話のところですが、縄文に関する体験を提供したい中で、加曽利貝塚では海での採集もあると思いますが、イヌの埋葬例も多かったので、縄文時代のイメージを覆すにあたって狩猟のイメージを覆すということが縄文のイメージを覆す上で一般の人には一番インパクトも与えて、伝えやすいのかと思っています。

縄文時代の人々がどのように狩りをしていたのかを学ぶ中で、原始的なイメージを払拭することができると思い、こういった体験を入れています。

(谷口委員)

私はやはりこれには賛成できないです。要するに動物を弓矢で射て殺すところまでやるわけでしょう。そうではなくてもっとすごい生態学的な知識に基づいてやっているとか、解体方法についても非常に熟練のものがあるとか、前の会議でも申し上げた通り、一つのムラでやっていることではなくて、狩猟組織とか獲物の分配もやっているとか、もっと総合的なものではないのですか。

これまでの動物考古学が明らかにしてきたことは弓矢で射るだけはないと思うんですよね。骨角器の製作だってあるし、資源を無駄にせず徹底的に使い尽くすとか、そういったところにむしろ縄文の狩猟の知恵というのが表れているように思うんですけれども。

(高橋委員)

確かに、加曽利貝塚を掘るとイヌもいっぱい出てきて、一般にはイヌは縄文人の狩猟のよき友だという風に思われているけれども、必ずしもそういうわけではありません。

南貝塚を見ると、イヌがまとまって埋葬されて出てくるのは、ある程度南貝塚の北西部のかなり限られた場所に集中しています。なぜそういうことが起きるのか。もしそれほど重要な狩猟の友なら、貝塚全体から出てもいいはずですがそうではない。区画的にかなり偏っていて、しかもしっかりと穴を掘って埋められて埋葬されている。中には屈葬までされている。人と同じ次元まで高められている場合が非常に多いんです。

ご存じのとおり市原市の西広貝塚では、わざわざ人間の墓域の、しかも先に埋められた人のお墓を荒らしてイヌを2体埋葬しているということをやっていて、すでに狩猟の友という一面を超えて、ある特定の動物と人間集団が社会的な関係を結んでいることが明らかです。

これはイノシシでもそうで、イノシシをシンボルとする集団はイノシシを大事にします。それで、その集団はイヌの集団とはやっぱり違うんです。そういう風に考えると、単にイヌを狩猟という関係だけで結び付けるのは、実に多様な動物との関係性の中でごく一つの関係性だけです。

だから、ここでイヌをある意味では原始的な狩猟のイメージを払しょくするために一番目に使うというのは実は逆行していて、むしろ人間と動物の多様なあり方、関係性こういったものを積極的に展示した方がいいように思います。私のいう意味はわかりませんか。

(青木委員長)

それでは、その部分は今高橋委員がおっしゃるように見直しをしていただくということによろしいですか。

(森本主査)

はい。

(青木委員長)

今のような結論でよろしいですか。要するに書き直ししていただくということですが、高橋委員、谷口委員よろしいですか。

(谷口委員)

見直していただくということですか。はい。

(青木委員長)

最後ですけれども、管理運営計画について。先ほど、保存研究担当を設置したことと、展示の動線の部分のつながりが変わったところですが、運営方法とか整備方式については、これは私の意見ですが、史跡部分とその周辺の部分と博物館を一体的に考えて運用していくということについては、みんな賛成だと思います。

ただ、実際の運営上、例えば指定管理にするなど、先ほど課長が例を挙げていただきましたけれども、その部分の議論はあまり本委員会には馴染まないのではないかと思います。

どういう方針にするかが千葉市側から示されて、ではそういう運営主体でやるならば、私達としてはこういうところに注意していただきたいということは言えると思うのですが、これは私の意見で、皆さんどう考えるかわかりませんが、皆さんはその点どうお考えになりますか。

例えば、今は運営方法についていろいろ方法もありますから、最低こんな条件を満たしてほしいと、これだけの条件を満たしてほしいという要件を委員会から提言することは言えると思うのですが、そういった方式でいくのか、あるいはこういう方法でいきたいというのを示されて、それについて最低これだけは守ってくださいねというのを委員会側から発するのか。

私達がこういう方法でやりなさいというのは決められないことなので。

(中村委員)

それは、具体的な運営主体はどうするかとかそういうことですか。

(青木委員長)

先ほど申し上げたのはそういうことですが、それはこの委員会の議論の中では馴染まないのではないかというのが私の意見です。

私達は、こういう条件のもとでお考えくださいというのは言えるけれど。

(佐久間課長)

整備と運営と2つありまして、まず整備が一番安くて適切な方法をとということで、こ

これは千葉市が具体的に決めるべきことと思います。ただ、今整備だけではなくPFIだと運営を一体的に行う可能性もありますので。もしもPFIなどになった場合には、青木委員長がおっしゃったとおり整備はいいけれども、運営はこういうところを注意していただきたいというご意見をいただく形になると思います。

青木委員のおっしゃるとおり、整備は基本的に千葉市が決めさせていただくべきことで、何を建ててどう運営するかは委員会でご議論いただくということ。

(青木委員長)

今の課長のご説明で皆さんよろしいでしょうか。

(高橋委員)

わかりました。基本的に調査研究というのは、博物館のアカデミックな部分の核心をなす部分ですので、これが縮減されたら大変なことだと私は考えております。

(赤坂委員)

展示は、先ほどお話したアプリケーションにあたる部分です。これは大事な点なのですが、なかなか外見で測れないものですから、整備にあたって面積の話をする時に何回も企画展をやればいけないと言われてしまうかもしれません。

(佐久間課長)

ここは、求められているのは博物館の中で模型を使ったムラを再現したいというのが最初のコンセプトでした。それが、博物館の中に再現する必要があるのかという問いが庁内であり、三内丸山遺跡のように史跡内で再現すれば済むじゃないかという意見が出ています。

それで博物館の床面積の議論をする時に、例えば掘建柱建物を復元する時に、それは施設内に建てる必要があるのかと。陳腐化もすぐすると。

それであれば史跡の中で再現した方がふさわしいだろうと。さらに、新型コロナウイルスの影響でどちらかというと非接触型の展示が求められています。デジタルミュージアムの話も出ていて、それに移行していくなら、映像系の方がデジタルに移行しやすいのではないかと。

(青木委員長)

だから、その部分の議論は最初の委員会の中でもやっていて、多くの委員は疑問符をつけたわけです。それはそれとして、それはもうそういうことを取り入れて行こうと進めてきたのであって、いざ予算的に具体化しようとなると、どこかを削らなければいけないということですよ。

私としては今課長がおっしゃったように、これだけは守ってほしいという部分は皆共有認識していると思いますので、なるべくその方向で議論していただいて、その上である程度方針が出てきたら、委員会での条件の中でこういうことに留意していただけないかということでもとめたらいいのではないかと思いますので。委員の皆さんそういうことでよろしいでしょうか。

(全委員)

異議なし。

(青木委員長)

千葉県吉野さんから何かありますか。

(吉野主任上席文化財主事)

私もいろいろな委員会に出席していますが、これだけ委員に発言していただいて議論していただいている委員会はあまりないと思います。非常にありがたいと思います。

一章で青木委員のおっしゃった、課題の抽出がなっていないというご指摘もありましたが、こういったそもそも出てきたのは、大分議論が煮詰まっていることで、他の委員会でも最後にこういった話が出てくるのがよくあるので、大きな課題がつぶされてきた中で細かいところが見えてくるということではないかなと思いました。

文化財保護法が平成30年6月に改正されて31年4月に施行され、文化財保存活用地域計画を市町村がつくり、市町村の文化財行政を一体的にやるということが法で定められまして、千葉市も地域計画をつくっていくことを考えていると伺っております。

県も文化財保護の方針として文化財保存活用大綱というものをつくりまして、県の大綱と地域計画とを連携した形でやっていきたいと考えているわけです。千葉市が地域計画をつくっていく中で、加曽利貝塚の博物館をその中で位置づけて、連携する形で市の大きな施策の中で進めていくということをしてもらえたらいいなと思いました。

そういったところでより大きな市の取り組みという中でやっていただけたらと思います。ちょっとまとまりませんが以上です。

(青木委員長)

ではこれで事務局にお返しします。

【閉会】

(事務局職員)

それでは委員の皆様、本日はお忙しい中ご出席いただき、ありがとうございました。それでは以上を持ちまして、令和2年度第3回千葉市史跡保存整備委員会を閉会いたします。ありがとうございました。

——了——